

Title	歐米の史學研究五十年
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.2 (1923. 2) ,p.49(209)- 67(227)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19230200-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歐米の史學研究五十年

歴史の科學的研究は、狹義にいふ史學の主體をなすもので、凡そ一百年前に於ける柏林大學のそれを以て初とする。これが豫備的階段となつた最高の價値ある多くの著作はバロニウスとムラトーリの如き苦心の蒐集家、マビヨンとヴァルフの如き活眼達識の考證家、ギボンとヴァルテールの如き名文家の手に依つて完成されたのであるが、次いでニーブルとベック殊にランケが柏林大學に輩出して、其の資料となすべき著作並に文書には批判を加へ考證をなしたる上之を使用すべきものなることを唱へつゝ自らもそれを實行したるより、史學はこゝに全く面目を一新し今日の發達を見るに至つたものである。余は、今、毎度引用せるグリチ氏の記述(註)に私見を加へて、戰前五十年間に於ける歐米の史學研究の狀況を瞥見し、是に於て

免れ難い不備の點をば他日の詳論を期して補正したいと思ふ。

現代の最も著しい特徴を見らるゝは人文生活の各章各階段の闡明とその解釋の用に宛つべき資料が山の如くに増加したとである。原始の文明は明確に史學の研究範圍内に取り込まれ、ブーシェード・ペルト、ピット・リヴァーズ及びその後の考古學者達の發掘と發見とにより人類の活動はその發端を少なくとも數萬年の昔に溯らしめ、先史時代の人類は頭蓋骨と武器、言語と傳説などよりして再現せられることゝなつた。人類學も科學となり、吾人の祖先の野蠻なる風習や信仰はタイラーとサレ・ジェームズ・フレーザーの慧眼によつて明かにされた。フレーザーの編述した『金の小枝』の博識と構成力並にその豊富なる暗示とは人類の發展に

關する吾人の知識に恐らく當代の最も大なる貢獻をなせるものであらう。

第十九世紀の中で最も世人の耳目を聳動せしめた事件の一は所謂上古の東邦即ち西亞の再興である。舊來の西洋史の卷頭に置かれてゐた希臘・羅馬は今日に於ては記錄歴史の發端を距ること遠く、其の文化は之に先だてる長き文化を繼承し發展したものであることが判明し、歴史の全奥行は發掘と發見の爲に著しく擴張せられた。之がためにアメリカに於ける現代埃及學の泰斗ブレスステドの如きは之を舊稱による古代と區別して『ニユー・イースト』と呼ばんことを提議した位である。斯の如くに開示されたる太古の世界は單にキリスト教的歐羅巴の玄關たるに止まらないで、時間の點より見て、人文歴史の大なる部分を占めることとなつた。この物語は、その發端について、既に本誌にも記した處の如く、ナイル河の支流ロゼッタ河口に於て發見された記念碑上の象形文字をシャン・ボリオンが解讀したのに其端を發し、其の解讀の成功はやがて上代埃及の文化を探險者の眼前に展開す

るに至らしめた。レプシウスは確實なる紀年の根底を作り、マリエットは組織的發掘を始め、埃及の太守より古事記ギレクダ・オサ・アンチクイチ係主事を命ぜられカイロ博物館を設立した。埃及學三大家の着手せるこの事業、最近五十年間に世界の學者團の努力によつて進歩を來たし、埃及古文字の解釋は先覺者達の考へだも及ばなかつた技術的熟練の域に達し、ブルグッシの天才はシャン・ボリオンもいまだ完全には読み得なかつた埃及俗字を讀破することを得た。然るに花を添ゆるの趣きがあつた。マリエットが晩年にこの言語學的勝利に加へて犁鋤の征服は錦上更りそのテーベ附近に於ける王陵の發見は最も評判を得たるものであつた。發掘者として、言語學者となりそのテーベ附近に於ける王陵の發見は最も評判を得たものであつた。發掘者として、言語學者として、又史學者として何れにも傑出せるマスペロは埃及學をフランスの民間に普及させた最初の人、マリエット以來の最大の發掘家フリンダーズ・ペトリーは等しく之をイギリスの民間に普及したる殊勳者である。今より二十餘年前に、埃及第四王朝のピラミッド建設者に關するカーテンが開か

れ、今日に於ては夫れ以前の諸王朝が回復されたのみならず、新・古石器時代の埃及も原始的墳墓によつて明かにされた。エジアルト・マイエルは新資料に接近せること多かつた爲、殆んど確定的の年代を組立つるに至つたが、併し埃及帝政時代の古中新の三期に亘る吾人の知識は非常なる進歩を見たるも、尙ほ第六王朝と第十一王朝との間には大なるギャップがあり、それにヒクソス人の時期はいまだ分りさうで分らない。最新の發見より見たる埃及史は上に記したブレスステドの正鵠を得たる著述によつて最もよく研究せられるのである。

第十九世紀の中葉に於けるローリンソンの楔形文字の解讀、ボッタとレヤードの發掘によるアッシリヤ文明の展開は、バビロニヤに對する共同の検討を伴なひ、アッシリヤの文獻的寶庫は大抵バビロニヤの模寫に過ぎないことがニネヴェーの瓦札によつて明瞭となり、一八七七年にはバスマラに駐在せるフランスの副領事ド・サルザックが南バビロニア即ちカルデヤに於けるテロ（スマーリヤ時代の要市ラガッシュの古址）に發掘を試みたる際、最も

熱心なる豫想も及ばぬ程度の好成績を擧げた。ローリンソンによつてセム以前のものであらうと斷定された正文はニネヴェーの圖書館の發掘に於て既に發見せられてゐたが、歴史に役立つべきスマリヤ語はテロに於て發見されたのである。ド・サルザックは一九〇一年にその死せるとき、歴史に新なる一章を開いた。千八百四十年代に世間を驚倒せしめたサルゴン及びセンナケリブの諸王宮は、カルデヤ市が非常に古いことの爲比較的近代的のものに見えた。アッシリヤの文化はその書法を含みその大部分がスマリヤ人よりセム人に傳承したものであることが分るに及んで、人類經驗の連續は目前に引き伸ばされた。ド・サルザックが終生を捧げてテロの發掘に努力した間に、米國よりの遠征隊は一八八六年ピーターズとヒルプレヒトに引率されてニップールに到着し、其の發掘の結果殿堂圖書館内に發見された數千の瓦札を含める浩瀚なる報告書は北バビロニヤの知識に最も重要な資料を提供した。更に降つて、コルデヴァイの引率せる獨逸の派遣隊はバビロン本市の系統的發

堀を始めたるも、惜い哉、世界大戰の勃發せるた

た。

めに其の作業を中斷するに至つた。バビロニヤにはコルサバードとニネヴェーに於ける記念碑と其の壯大を競ひ得るやうなものは出土せざりしも、バビロニヤの文化は際立つて四隣に光輝を放つてゐた。ニネヴェーの王室圖書館に於て洪水傳説を刻記せる世間に八釜ましかつた圓柱形土器の出土してより以來、之に劣らぬ世界的興味を起させたのは一九〇一年スーザにてド・モルガンの堀り出せるハンムラビ法典の發見である。二百八十二節の法律を刻せる閃綠岩高さ八呎の石柱は忽ち精緻にして複雑、秩序の整然たる文化を暴露した。ハンムラビは紀元前二二五〇年頃エラム人を驅逐したる後、南北バビロニヤを合一して統一國家を作り、劃一せる法律の實施を望んで、右の法典を發布したのであつた。アッシリヤに於ける踏査發掘は長く中斷したる後最後の十年間に再始され、初都アッスールは獨逸東邦協會の手にて發掘せられ。斯くして吾人は全盛期以前のアッシリヤが尙ほバビロニヤの屬領であつた當時を知るに至つ

チグリス、エウフラテス兩河の貫流せるところメソポタミヤの歴史は半世紀前には殆んど白紙に等しかつたが、今や試験的に再建し得るに至つた。官廳の通信、判決文、法律文書の巨大なる分量は宗教・科學・藝術上の證據と相俟つて、ラムセス以前の一千年前後、ペリクレス以前の二千年を開展して、近代社會を驚ろかせた。バビロニヤが上古の東邦に對する關係は羅馬が後日歐洲に對すると同じであつた。埃及のテル・エル・アマルナ文書は、その文化が廣大なる地域に獨歩の優越を示したことと證據立て、猶太人の宗教的負債の暴露は舊約聖書に新見解を加へ、發掘と解釋は長足の進歩を遂げたれば上古の東邦に關する記述は最近のものでなければ殆んど用をなさぬこととなつた。吾人にしてもしレナード・キングのバビロニヤに關する大著新版を消化し得れば更にそれ以上を求むるの要がない。

その著名なること之に劣らざるは紀元前第二、

第三千年紀に於けるクリート島の高度文化の發見

一をなしたことを物語つて居る。

である。埃及及びメソポタミヤに於て、知識の境域が古へに押し擴められつゝあつた間に、他方クリート島に於て未知の世界が開かれた。そのロマンチックな興味は上古世界の最も著名なる傳説の一に歴史的基礎を確定したるため之が一層強まつたのである。ミノタウルが迷宮内で若き男女の生贊を食ひ盡したる有様や、ミノスの娘アリアドネがテシウスとの戀に陥つて彼にミノタウルを殺させる剣と歸路のしるべとなるべき糸を與へたことは希臘の少年に知らぬものゝない程の話であつたが、今や當代に於ても人氣を湧かさせた。ホーマーのいふ『大クノソス』市の發掘はシユリーマンの宿望とする所であつたが、これは遂にサー・アーサー・エヴァンズによつて達成せられた。彼の努力は紀元前一四〇〇年頃の王宮の破壊に先立つ二千年間のクリート史上の數章を略説させた。ミノス語は尙ほ討究を不可能とするも、その壁畫と彫刻と藝術によつて之を見れば、この豪奢な平和的の社會が埃及と密接な關係を有し後代の希臘文化の本源の

館に藏めてある。二國語を並刻せる少數の碑銘は、貴き手掛を供給したのであるが、この寶庫を開扉すべき新シャンボリオンはいまだ顯はれない。寶庫は熱心にその人の到來を待つてゐる。この未開の史域を開發して世界的學者となりたい日本人はないであらうか。ヴィンクレル其人は一九一三年に死したるも、一九一五年にはケタ語は印歐語であるといふ確信を述べて世を驚かした學者があつた。墺國の教授フロツニーがこれであるがこの主張が確證せられるか否かは目下熱心に研究中なる兩半球のオリエンタリストの成果を俟つべきである。恐らく爰十年を出でないでケタ語は恰も今日の楔形文字や象形文字の如く讀破せられ、上古西亞の歴史に貴重なる數章が新たに添加せらるゝことであらう。

パレスチナ周邊の帝國の政治史と宗教史の回復は猶太の聖典の批判的研究と雁行した。エヴァルトのイスラエル民族史を讀むことは、前世紀の中葉に於ては敬虔なる人々より危険視せられてゐたのであるが、之によつてもセム研究の進歩を知り

得る。舊約全書に對する考へ方に著るしい變化を起させたのはヴェルハウゼンのイスラエル史序説の效であつて、サシモのエワルドの著述も時世に後れしむるに至つたのである。舊約聖書中の正經の配列が全く誤れること、豫言書は祭司法典よりも早く、詩篇の多くは以上の二者よりも後ちなることが、ヴァトクとグラーフ、クエネンとロイスの著作及び講義によりて明言せられたるもの、之が勝利を得たるはヴェルハウゼンの確證と精査を經たる後であつて、猶太人の宗教上の發展はそれらの改修によりてのみ明にさるべきことが一般に承認せられ、この輪廓は、其後間もなく、ステードのイスラエル史上に初めての批判的著述によつて充たされた。然るに彼は傳説の誤りを餘りに力説したる爲、其後の批評家をして祭司法典の後代に編纂されたる者なることを承認し乍らも、その一部分は形式は兎も角本質に於てはヴェルハウゼン及びその門弟の許容せんとするよりか遙かに古しと論するに至らしめた。

猶太人の歴史はその史的生活の領域に於て考古

學的研究に負ふところ、埃及・メソポタミヤに遠く及ばず、立派な建築も彫刻も未だ發見されず碑銘も亦殆んど存しない。然るに英米獨の發掘者達は遠く第三千年紀に迄光明を授じ、エルサレムの部分的發掘は先史時代の墜道及び水道が縱横に布設せられてゐたのを明かにし、ゲッエルに於ける歴史的生活は新石器時代に迄溯及し得る七市の層と共にマカリスターによつて詳細に示され、二千年の岩屑中より發見された見事な藝術品の作者フリスチャ人を復興したのは彼の發掘のうち最も顯著なる成功を示すものである。然るに猶太人の宗教的慣習と信仰の上に投せられた更に大なる光明とは其の境域外の諸發見によつてとあつた。イスラエルを以て最古の文化の一に數へ、それ丈けで獨立に世界を形成してゐたといふ舊來の確信は跡方もなく消え失せた。そのバビロニヤに負へる負債の大きさは急進保守兩面の評者の論争を見たるも、その承認はイスラエル初期の研究を一變せしめ、世界の宗教史に新しい背景を供給するに至つた。猶太人の信仰と實際がセム民族系統中の他

派のそれとの間に於ける關係はロバートソン・スマスによつて大膽に發表せられ、更に近くはフレーザーの舊約聖書の俗傳風習に關する劃期的大著述によりて明にされた。

希臘史も亦猶太人の歴史と同じく一變し、グロートとサールウォーレルやクルチウスの讀者に提供せられたものとは全く別の世界を示すに至つた。シェリーマンのトロイ、チリシス、ミケネに於ける諸發見はミケネ文化を世に示し、考古學的研究に無限の刺激を與へた。然るにこの名譽の好事家も哀はれにも、自己の發掘物を解釋すべき十分の準備がなかつたので、その作業の多くは再びヴェルフエルの努力に俟たねばならなかつた。斯く考古學的の貢獻はありたるも、ソロモン以前の時期は尙ほ頗る漠然たるものがある。シェリーマンの發見の效績にも讓らざるはアリストートルのアテネ憲法史の發見であるが、こは一八九一年サー・フレデリック・ケニヨンにより出版せられ、現時に於て最大の希臘學者なるヴィラモ・ヴィツツにより最も信據すべき解釋を得た。碑銘、貨幣、パピルス

文書なごの文献資料の新增加は遺跡の發掘、無數の藝術品の發見、小亞、クリート島より發射する新光明と相俟つて、希臘修史の新計畫がなされ、科學的であつて同時に通俗的なベリー教授の叙述は英文讀者のために確實なる研究を基礎として之を概括したものであるが、斯界の最も權威ある概説はエヅアルト・マイエルの上古史中の希臘に關する部分である。彼は言ふ、「歴史の大事業にとり研究に生面を呈するは、之が上古なると近代なるとを問はずその普遍性を意識するに至りしことに於てのみ。希臘を地中海の諸民族と關聯して論ずるときには、其の眞相は捉へ得る」と、この大事業はゾンケルの力の及ばざる所であつたが、當代第一人たるこの柏林大學教授は單獨にて之を行つたのである。グロートの筆になるアテネ民主政治の華麗なる名畫は爰に光輝を失なつた。ドロイゼンの流を汲めるベロッホはアレクサンダーの征服により希臘の勢力が弘布せることを巧に論究して居る。

希臘文化は是迄その政治に劣らず注意せられ、

ラモヴィツからジルバート・マレーとウォルター・リーフに至るまでの各専門家は各その理解に貢獻したが、積極的結果は少しも得られなんだ。ホルムの如きは不愉快な豫言をなして、ホーマーが存したるか否か、彼が何人であるか、何をなしたるかは將來とても決して知られないであらう。之に反して、吾人が希臘初期の人心を十分に諒解するを得るに至つたのは、シェーン・ハリソンを筆頭とする英國の學者の寄與によるのであつた。ロードの著『サイキ』(希臘の宗教に關する最も雄麗なる論文)は古來の靈魂不滅の概念を研究し、ツェレルの希臘の哲學(一八五一年初刊)の諸版は何れも學者の研究と併進し、獨逸學問の榮譽である。其後に出了たる人ゴンペルツの著作は殆んど之に匹敵する名聲を博した。文學の方面で最も興味のある事件は、大作家のゴンペルツの詩や、サッポーとピンダーやエウリピデスとソフオクレスとメナンデルなどの斷簡、更にオキリンクスのパビルスの發見である。こは既に思ひ掛のない寶物となつたが、

ホーマーの問題は依然否み離い注意を惹き、ヴィ

更に未來に喜悅を殘すものと言つてよい。經濟的

要因を査定せようとする企は勇敢にもベックによつて企てられた。其の死後幾分か閑却されたるも近年又再興せられ、チンメルンの第五世紀に於けるアテネの現實的描寫の如き其の成果である。

ニーブル以後の羅馬史研究は大體に於て唯一人の活動ありしのみ。モンゼンの作中、最も個性に富み、最も流行せる『ケーヴルの死に至る迄の羅馬史』は夙に一八五四年に公刊を初め、全世界にその名聲を轟かしたものである。彼は次いで特殊部門の研究に轉じ、矢繼ぎ早やに、紀年學、貨幣史、羅馬法典中のデゲスター、『國法學』を刊行した。就中この國法學は彼の作中最大の、そして彼れ自らの意見による、その最も重要な作であつて、恐らく法制史上最大の論文であらう。其間に彼は伯林學士院の需に應じて『ラテン碑銘集』を監輯したのであるが、こは彼の生涯の主たる事業であつて且つその最も永續的な記念碑である。彼は羅馬史刊行前に、ラテンの金石文の研究に耽り、又サムニ及びナポリの碑銘を編纂した。ラテン碑銘集は一八六三年に第一刊を出だしてより、彼の存命中に

約二十卷を出版し、その半數は彼れ自らの編纂したものであつた。この碑銘集は羅馬帝政時代歴史を可能とし且つ全世界の期待があつたにも拘らず彼は羅馬史第五卷てふ小題を附した屬州の概説を出せるに止まり、遂に第四卷を出さなかつた。彼の晩年は厖大なる羅馬刑法論とヨルダネス、カシオドルス、テオドシウス皇帝の現行法典、法王の書の編輯に費やされ、彼の活動範圍は擴大して中世史の初期に及んだ。かく彼の出版年代は前後六十年に亘つたが、その初年の作に未熟のものなく、

晩年の作に蕪雜なものを見ず、その大袈裟なる想像力と細密なる批判力とは過不及なく均衡を保つてゐた。スカリゼル以來學者の夢想してゐた希臘羅馬の上古文化の完全な理會と再現とはモンゼン一人によつて達成せられた。モンゼン以前の羅馬亦アウグスツスの如く煉瓦造の都を受取つて大理石造の羅馬を殘したと誇稱してもよいであらう。モンゼンはランケと等しく一派の建設者である。彼のインスピレーションは羅馬研究者の悉く

感受せる所である。彼の後繼者は自然その研究を特定の領域或は特定の時期に限定した。ガエタノ・デ・サンクチスは最近半世紀に企られた最も抱負の大なる史作のうちで、羅馬の共和時期に關し最も傑出せるものである。フェレロの羅馬興亡史は、學究の徒よりは攘斥せらるゝも、羅馬共和政の衰亡に經濟學的及び心理學的の解釋を下して一般的興味を喚起した。スーラよりアウグスツスの時代に至る一世紀間に於ける政治上社會上の危機は、彼によれば、富力と入費並に所用の増加に基づく習慣の變化によるのである。更に重要なのは帝政羅馬の大領域を分擔して研究しようとする企である。例へばガルトハウゼンのアウグスツス治世の記念碑的概説、カミール・ジュリアンのガリヤに關する書卷、ハーヴィルドのブリタニヤに關する立派な書冊などは是である。羅馬の生活と文化とは勤勉に研究せられたが、材料の現存するものが至つて乏しいので共和初期の状態の回復を殆ど不可能とした。最も大膽なる計畫はフェステル・ド・クーランジュの古代の都市的國家に於てなされた。

これは上代世界に宗教的の完全なる解釋を下したものである。之に比して幾分不調和の點あるも遙に確實なる宗教界の光景を示せるものはワード・ファウラーの著述であるが、他面に於て帝政時代の文化は相次いでフリードレンデル、ボアシェー、デルなどの權威ある眩惑的の著述に於て分折せられ、之と同詩に考古學も斷えず新資料の増加に寄與する所があつた。ボニがフォーラムとパラチノに於ける發掘は目覺ましい成功を博し、ポンペイの發掘は徐々に進行し、羅馬市の港オスチャのそれも亦着手された。ナポリとポンペイ間のヘルクラネウムの復興は現代には覺束なくとも次代には見られるであらう。

羅馬帝國よりも議論が多いので一層困難とされてゐるのは、同代に於ける初期キリスト教會の問題である、前世紀の中葉にバウルはキリスト教の勃興を一つの歴史的現象として取扱かひ、その人事の問題であるか將た神の問題であるかの決定を聽衆自からの判断に任せた。しかし、其の感化の方が著作よりも永續的であつた。チュビングンに

於けるその後任者ワイスツェッケルは其著使徒時代に於て初期のキリスト教の團體生活及び組織を遺憾なき學識と公平無私な態度を以て記述した。キリスト教の發祥地に對し周到なる研究の必要が今や一般に承認せられ、シェーレルやフライデルの如き大學者達はキリストの生れたる宗教的零圍氣を再現した。原始教會の構成も、ライトフットとハッチにより頗もしく公平に研究せられた。併し古今を通じてハルナックの如き功業を誇り得るものは他に見られない。彼のキリスト教々理史はエウセビウスに至るまでのキリスト教文獻に關する廣汎なる概説、コンスタンチヌス大帝の改宗以前に於けるキリスト教發達の叙説であるが、こは熱心なる研究者の無二の好侶伴である。^{カダ}地下墓室内の寶物はデ・ロッジにより開示されたが、羅馬のキリスト教碑銘の公刊も又彼の效績である。羅馬帝國の僻陬の屬州に於ける初期キリスト教團體の歴史はラムゼーの小亞細亞に於ける踏査探險によつて豊富にされた。最上の著述は自然單行本にて出だされてゐるが、包括的の叙述も屢々第一

流の學者達によつて企てられた。ルナンの異彩を放てる諸著は廣く一般の人氣を博し、其の一部には今日尙ほ讀んで利するものもあるであらうが、彼の諸著はその猶太人史の如く科學といふよりか寧ろ文學の方に屬するものである。吾人もし最近半世期間に於ける斯學の平易なる概説を求めんとせば舊教徒ヅシャン師の書冊、更に良好なるはグワトキンのそれを見るべきである。

ミザンチウム帝國に於ては政治と宗教とが相交錯してゐるが、その晩年の歴史はギボンによれば『柔弱と不幸との唯一の退屈なる物語』であつた。

帝國が文化に對する貢獻とその多くの君主の偉大とはフインレーによつて世に示されたが、その叙述はフリーマンから英文の史籍中ギボン以來の最も重んずべき著作なりとの賞讃を受けた。爾來半世紀の中に一千年の探究が着々として進行しつゝある。フランスに於てはランボー、シニリュームベルゼー及びデール之が指導者となり、デールが一八九年巴里大學に創設せられた講座の最初の擔任者となつたのは彼の努力に對する報酬であつた。こ

の三人中の何れよりも傑出せるは獨逸のビザンチウム學者の王といはれたクルムバッヘルである。一八九二年彼の爲に一講座がミュンヘン大學に設置せられ、ビザンチウムの文獻に對する彼の百科全書式概說はこの領域の史學研究に於て唯だ一冊の要著であつて他に類を見ないのである。英蘭はベリー教授によつて立派に代表せられ、そのビザンチウム帝國に關する叙說は既に第九世紀にまで及んでゐる。

ビザンチウムは二世代の學者の研究により最早や惰弱無氣力でなく大政治家軍人の母國となり、中部及び西部歐羅巴が暗黒の裡に沈淪したる間に希臘・羅馬の文明の鄉土となり、又アラビヤと土耳其に對しねリスト教國歐洲のために一千年間の保壘となり、スラーヴ系諸人種の教育者ともなつた。フリーマンはコンスタンチノープルが幾百年間唯一の規律あり系統的なる政府の所在地であつたと正評し、其の行政機關は古來人類の發明せる最も緻密なる機關、該宮廷の中世歐羅巴に對する關係はヴェルサイユ宮が第十・七八世紀の君公達に對するが如く

であつた。この宮廷は自由を知らざる官僚的專制的であつて、藝術を除くの外、其の精神は模倣化を保存し數度の回教徒の攻擊より之を擁護したるは實に文化のために盡したものと言ふべできる。

ビザンチウム帝國が上代世界より希臘・羅馬の重要な分子を取り込んでゐる間に他方西部及び中部歐羅巴は之と全く異つた思想に支配せられた。最早や第十八世紀に對する盲目的侮蔑と主義運動の盛なる狂熱とは失はれたが、アウグスツスに始まりマキアヴェリに終れる一千年間の特質を正しく評量することは今日尙ほ困難とする所である。歴史の資料は年々増加し、フランスの古文書學校に教ゆる如き資料の批判考證は精密科學に近づき、ブライス卿の御蔭で神聖羅馬帝國は理會され得るに至り、制度の構成と職能とはヴァイツとスタブス、クーランジュとヴィノグラドフ、メートランドとギエルケによつて根氣よく分折せられ、文學と藝術、スコラ哲學と中世の大學生はその編

年史家と解説者とを見出し、治者と國家、條約と會議は何れも數限りのない書冊によつて研究され得る。併し中世期は就中カトリック教會の治世であつた。この尊貴の制度は人的なると神的なるとを問はず、文化史上に獨特の地位を占むるものであるが、その功過と勢力に關しては今尙ほ異論百出の有様である。

前世紀の中葉に於て、中世教會史はネアンデルとミルマンの廣く讀まれた著作の中に全く別種の解釋が下されたが、一八八一年法王レオ第十三世のヴァチカン文書解放により初めて法王朝の全史を記述し得るに至り、又カトリック教の機關の運轉を理會することも出來得るに至つた。法王廳の公文書は山の如くに積まれ、隨つて之に對する技術的訓練を要することも大なるより、史料が總覽せられて之を修史に利用するまでには尙ほ數年を要するであらう。記録の價值に關してはバリオル師の中世の政教關係についての含蓄の多い講義によりて知らるべく、こは第十三世紀の中葉に於けるインノセント第四世の治世十一年の文書八千通

に基いて作られたものである。是等の文書の研究は法王朝の組織を賞讃するに至らしめ、是が宗教は勿論、法律、政治の中心として當代の君主達に對して非常に優越せる地位を確信せしめたが、併して彼は又制度の中心に喰ひ込める弊害、之より生ずる惡感の増加、伊太利の中央に有力なる國家を建設せんとする熱情が荒廢的效果を及ぼせる惡弊をも深く感受したと言つてゐる。

宗教改革前の二世紀間に於ける法王朝の記錄を讚美せんと企てた新教側の史家は存しないが、しかし中世期の前半に於ける教會の範例とその努力とが暗黒世界に燐爛たる光輝を放つたことは一般に是認する所であつた。然るに之に對する反対も無きにしも非ずで、近くクーレトンはガスケットト其他の宗職の人々よりせる特殊の辯護を憤り信仰の時代の高調を猛然として攻撃し、中世期は兎に角英蘭にては科學的精神の未だ入り込まない歴史の一領域であると嘆じ、中世最高潮期に於けるカトリック教徒の日常生活に最も精通せるフランシスカン派の僧フラ・サリムベーの自叙傳を引

用して、その風俗と道徳を示せる陰鬱なる状況を寫し、第十三世紀より遠き以前の一切の僧團には恐ろしい罪惡が存してゐたと主張し、更に『空想は當代と現代との間に開口せる道徳的の灣に向つて踊躍してゐる』と叫んだ。彼の教會攻撃は幾分激越なる調子にてヘンリー・チャーレズ・リーの断案を反響してゐる。リーの大冊宗教審問所論はアクトン卿より舊世界の宗教史に對し新世界の最も重要な寄與てふ適評を受け、その祭司獨身論は中世のカトリック教に對する恐ろしい公訴狀である。

キリスト教の起源に次ぎ、歴史上に議論の多いのは宗教改革である。爰に於ても新教各派の何れもが相團結して舊教徒に當り、教會に改革の必要があつたことは兩派の一一致する所であるが、舊教徒は救濟さるべき弊害が狂的に誇大されたこと、反亂の必要がなかつたこと、ルーテルの開始せる革命は獨逸をその當初よりも悲境に陥し入れたことを論じ、ヤンセンは新教的の見解がランケの傑作宗教改革史に最もよく代表せられ且つ之が勢力をを得てゐることを知つて、中世期の終末より三十

年戦争の勃發に至るまでの獨逸民族の文化史を編述した。彼の大冊八卷の獨逸史は全部根本資料を基礎とし凡ゆる方面よりこの問題を説明したものであつて、世界中の舊教徒より感謝の念を以て熱心に歡迎せられた。第十九世紀の舊教側の史書であつて、斯程まで好評を博し、又それ丈け論議を引き起さしめたるはない。實にこはボシュエリの『新教の變說』以來の宗教改革に對する痛罵である。ヤンセンの目的とする所は第十五世紀が道徳的知力的の老衰の一時期でなく、健全なる活動、豊潤なる囁望の一時期であつた事を示すにあつた。彼は宗俗の教育の盛んであつた狀態、藝術の活氣、農民の慰悅、都市の繁榮などについて記し、第十六世紀に入りては異端の人文主義を誹謗し、ルーテルの反亂のために獨逸が物質上及び道徳上に沈んだ恐ろしい光景を書き、其後の書冊は反宗教改革期に充て、濟度し難い陰鬱、不道徳と亂醉無智、迷信と暴行の有様を寫し、斯くして第十五世紀の光彩に初まつたこの物語は深い陰影の裡に没入し、獨逸の滅亡は三十年戦争によるのではな

く宗教改革に基づくのであると断定した。

新教の史家は猛然として、この大膽なる偶像破壊者を襲撃し、彼が史料を無批判にて使用せるこゝ、連絡のない個々の事實より概括するの習慣と自黨に不利なる事實を陰蔽せることを摘發することを困難とした。但しヤンセンの書は巧妙なる論難の書であつて、私心のない科學的述作にはあらざるも、自尊心のある新教徒をして舊教徒側の説を知量せずに宗教改革を論ずること不可能ならしめた。パストルは同一傾向の更に價值ある記念碑的大著を出し、之に於てランケもクレートンも使用し得なんだヴァチカン文書を使用して文藝復興と第十六世紀の法王達の歴史を記した。眞に公平なる宗教改革史は新舊兩教徒の何れによつても書かれたことなきも可なり確實なる基礎は得られたのである。ルーテル派の最大の學徒なるカヴェラウの著作は最近代の何れの著作もが受け得ぬ信頼を得た。

ランケの主著は本文の範圍外の時期に於て公にせられたるも、彼の影響は最近半世紀間に於ける

殆んどすべての近代史家に認め得る。彼が學界に寄與した最大の貢獻は過去の研究を現在の熱情から切り離したこと、其の處女作の名句によれば現實に發生せるまゝに述ぶるにあつた。第二の貢獻は彼が嚴密に當代の史料を基礎として歴史を編述することの必要を確立したことである。一八二四年ランケが著述を始めた際、著名なる史家は備忘錄や年代記を信頼しえべき指導者としたるに一八八六年その擱筆の際には苟も名聲を得べき著名の學者は記述すべき事件の當事者又は之と直接の關係を有する者の文書や通信を以て満足すべきことを知つた。第三の貢獻は同時代たると否とを問はず、史料製作者の氣質、交際關係、知得の機會に照合して之を分折し、且つ他の作家の證明と比較する考證學を建設せることである。著作者の危險や責任に關しての準備はギッチャルヂニ、サルビ、クラレンドン、サン・シモン並にこの巨匠の著述六十卷の中に散見する許多の作者の批判的分折を研究するに如くはない。最後に、彼は其の教訓により實例によつて國家間に於ける相互の關係を明か

にし、且つ内治と外交政策の交互作用を測定するの必要を教えた。

是等の健全なる原理は諸國の學者によつて採用せられ相合して最近四百年間の歴史を組立つるに至つた。ポラード指導の下にチュードル朝を、ガーデナーとファースの下にスチュアート朝を、レッキー

内外に激しい論争を見たる後の獨逸の統一は自然史學の上にも影響し、ランケの指示した正路を偏かせしめた。ランケは奈翁戦後の政治界の沈滯ある。マコーレーとカーライル、モトレーモフルードの彩筆は依然賞讃せられつゝあるも、併し彼等の黨派的色彩はその時世後れなることを本能的に直感せしむるのである。又等しく冷靜なる研究は佛國をも風靡し、チエール、ミシュレーの情熱的史風は一轉してミネー、ギゾーを筆頭とする冷靜と明瞭とを重んずる記述を見るに至つた。テーンのジャコバニズムに關する明細緻密なる研究、マッソンのナポレオンに關する幾多の著述、吾人の知識に大なる貢獻をなしたオーラールのフランス革命史論などは何れも夥多の先輩の研究の結果によるものである。併しラヴィスのルイ第十四世に關

する長文の描寫、セギュールのチュルゴー及びネッケル論、ソレルの歐羅巴及び革命に關する巨著、ヴァンダルの統領政治に關する無比の表現など、其の學識に於ても、又文學としての價值に於ても高級に位するものである。

内外に激しい論争を見たる後の獨逸の統一は自然史學の上にも影響し、ランケの指示した正路を偏かせしめた。ランケは奈翁戦後の政治界の沈滯時代には既に成年となつてゐたが、この巨匠の昂然たる客觀的態度は熱血的史家の一團より非難蒙つた。世にプロイセン學派と稱せらるゝは彼等であつて、民族的、國際的の時事問題に於て國人を指導獎勵する事を以て、史家第一の任務であるを確信せる人々である。その三大巨頭の長老ともいふべきドロイゼンは厖大なる書冊プロイセン外交政策史に於て四百年間の史實を捕へて、獨逸總體の爲に終始盡力を惜まなかつたホーエンツォレルン家のみが帝國再興の適任者であることを證明せんとして、専らプロイセン文書局の資料のみを用ひて著作した。かくプロイセンの眼鏡を通じて

見たる歴史が片面的のものであるのは勿論であつた。歐洲史の研究者であつて、彼の綿密なる調査の價值を争ふものはないであらうが、プロイセンの政策に對して獨逸民族主義的の解釋は直に根本より誤りであることが承認せられ、久しく之を放棄してゐた。この派の第二人ジーべルはランケ門下の三愛弟の一人であつたが、中道に於て恩師の説に叛き、フランス革命の時代及び獨逸帝國の建設に關する二大論著に於て、ホーベンツォーレン家の政策の闘士となり、其の競敵佛、奧兩國に痛棒を喰はせたのである。

三大巨星中の最後に出でゝ而も最も偉大なるトライチケは學界に於けるビスマルクとも言ふべき人、彼は終生を捧げて、第十九世紀獨逸史の著述に没頭し、獨逸の讀書界に愛好せられたこと、恰もマコーレーの等しく未完の傑作が英語世界に賞讃されたる如くであつた。この獨逸史はドロイゼン及びジーベルの作と異なり、遙かに政治的叙述に富み、民族的發達の跡を百科全書式に概説したもので、その論題はプロイセンの國家を轉成して帝國

歴史の本流は爲に再びランケの作った正路に復歸し始めた。モリツ・リッテルの反宗教改革及び三十年戦争に關する叙述、コーセルのフリードリヒ大王傳、マックス・レーマンのシャルンホルスト及びシャーティン傳、エーリヒ・マルクスのビスマルクと其の主君の研究などは、博識なると論斷の正鵠を得たるに於て顯著なるものである。

舊世界に於て行はれた冷靜なる客觀的態度は新世界にも移植された。第二十世紀のアメリカは清教植民地に關するバンクロフト得意の理想畫を微笑しつゝある。今尙ほ餘燼を止むる南北戦争すらもジエムズ・フォード・ローズに於て、南方のジエファソン・デーヴィスとリードに對すると同一の筆法を以て北方のリンカーンとグラントに對し得る史家を得た。併し米國の史家であつて廣く影響を及ぼせることメハンに比すべきものはない。メハンの第十七八世紀の海權論(一八八九年出版)は海軍史なる史學の一分科を建設せるのみならず、又兩半球の著名なる門下によつて十分に會得せられた。

廢帝ウイルヘルム第二世の如き、ローズ・ヴェルト

の如きその例である、提督の記述の重きをなすは新事實を解明すべき調査的研究でなくして一般に熟知されたる事件を新方面より考察したるにある。隨つて特定の結果を決定するに當つて、海權的の要因が往々にして他の要因を無視して過大に力説せられたるも、海軍史の大勢を捕へて、世人にその重大なる意義を注目せしめたるは彼を以て初

こする。

斯くて歴史の領域は次第に擴大せられて人生の全般を網羅するに至つた。既に他處に於て記述したる處の如く、最早や今日シーレーやフリーマンの狹隘なる史觀を以て満足するものはない。舊來の問題たる民族の發展、偉人の功業、黨派の盛衰等を初めし、自然の影響、經濟的要因、思想の變遷は言ふ迄もなく、文藝科學・宗教・法律・哲學等の文化に及ぼせる貢獻、物質的生活條件、民衆の運命等に至るまで種々の興味ある問題が提起せられ、是等百般の事象は一として史學の論題とならざるものなきの有様となつた。政治史と區別さるゝ文

進めんと欲すれば、レッキーの合理主義の歴史と道德史、ブルクハルトとサイモンズの伊太利文藝復興史論、サント・ブーヴのヤンセン教徒に關し委曲を盡せる描寫モーレーのヴァルテール、ルソー、百科全書編纂家に對する研究、チャーチのオックスフォード運動の記述、マルツの第十九世紀歐洲思想史の如き啓蒙的著述を讀破すべきである。吾人もし日常凡百の業務に盡せる民衆の生活を想思せんと欲せば、シュモーレルとソロルド・ロジヤース、カンニンガムとコヴアレフスキ、ウェブ夫妻とハモンド達の眞面目なる研究を引用して經濟的要因とその勢力を測定すべきである。

以上五十年間に於て史學の研究は廣大無量の進歩をなした。其の研究法も次第に完成して、自他の別なく各種の歴史が公平なる態度を以て編修せらるゝに至つた。然るに不幸にして世界大戰は平靜なる史界をも白佛の戰野に等しくし、交戰各國の史家は平常の學究的態度を棄て、恰もプロイセン學派の復活せるかの如く、激烈な黨派心を發揮した。凡ての科學に必要なる客觀的態度と世界的

の協同研究とは劍戟のために破壊せられた。是を戰前の常態に復歸せしむるには尙ほ數年を要するであらう。然るに其間に於ても、泰平の世にも見難い平靜の態度を持して、第十九世紀に於ける獨逸の發展を叙述しつゝあつたサー・アドルファス・ワードやウリアム・ハーバット・ドーソンの如きを見るのであるが、こは少數の異例に止まる。史家も亦血と肉の人なれば世人と等しく愛國心を發揮するのも止むを得ないであらうが、苟くも其の高き天職を以て自任せんとするものは、宜しく一時的情熱と偏見とを去つて一向に眞理の研究に没頭すべきである。歐米各國の史家が世界大戰に對して抱いた偏見も比較的其の影響を見なかつた本邦は之が修史に好位置を占むるものである。世界大戰史の傑著果して日本に出づべか乎。

註 Historical Research, by G.P.Gooch, in Recent Development in European Thought, edited by F.S.Marvin, 1920; History and Historians in the 19th Century, by G.P.Gooch. 2nd., 1913

間崎万里